

「昭和史（1926～1945）」 著者：半藤 一利（はんどう かずとし）

今回は、3月の読書案内の「ノモンハンの夏」で疑問だった「なぜあれほどまで日独伊三国同盟に反対していた海軍や天皇が三国同盟を認め、太平洋戦争に向かったのか」について、真実にたどり着きたいと思った。

日露戦争に勝って、とにもかくにもそれまで全く関係をもたなかった満州に日本が足を踏み入れ、軍隊を派遣するスタートとなった。ロシアの南下を防ぐためにも満州は、日本の防衛線として役割を果たすこととなり、鉄道や住民を守るために駐屯した日本軍は、後に「関東軍」と呼ばれ70万人ぐらまで拡大していったのである。

中国内においても、清国が倒れ、蒋介石の国民党軍や共産軍の抗争が絶えず、大正時代に入っても中国は混乱を続けていた。昭和に入り、満州の大軍閥として君臨していた張作霖であるが、当初は日本が後押しをしていた。

しかし、日本軍自らが満州を統治してしまおうとして、張作霖の乗った列車を爆破し、殺害したのである。関東軍の陰謀である。この陰謀を知った天皇は、時の田中首相に軍の首謀者を厳罰に処するよう指示したのであるが、一向に実行しないため怒った天皇は、田中首相に辞職勧告をしてしまったのである。間もなく田中総理は辞職し、亡くなった（自決か？）のである。

『この事件以降、天皇は内閣の上奏する所のものはたとえ自分が反対の意見を持っていたとしても裁可を与える決心をした。「君臨すれども統治せず」である。』

1930年（昭和5年）1月21日ロンドン海軍軍縮条約で補助艦艇に関する縮小が討議され、対英米69.5%で話がまとまり、最終的に天皇に報告し裁可を得た。しかし、国会ではこれが問題となり、海軍の判断は天皇の統帥権干犯であるとし、「海軍上層部は責任をとって辞任すべきである」ところまで追い込んだのである。

『この時、海軍の良識派と言われていた海外経験が豊富で世界情勢に明るい優秀な人材が、海軍を去り、一方強硬派は着実に海軍の要職へと戻ってくるのである。』

これらの事件が、日本を戦争に向かわせる歯止めが亡くなる前兆であったと思われる。

日本は、満州国建設をきっかけに、マスコミや民衆が一斉に軍部を支援しはじめ、軍部（特に陸軍・関東軍）の暴走が始まり、世界から孤立するとともに、二・二六事件、五・一五事件など暗黒の時代に入っていくのである。

1937年（昭和12年）7月7日盧溝橋事件に端を発した日中戦争が勃発し、ついに日本は戦争から足を抜けられなくなり泥沼化していくのである。このころ永井荷風の日記（昭和11.2.14）に「日本現代の禍根は政党の腐敗と軍人の過激思想と国民の自覚無き三事なり」と書かれている。

日本国内（陸軍・マスコミ・民衆）が三国同盟に賛同している中、まだ天皇も海軍もぎりぎりのところで反対することができたのである。

1939年9月第二次世界大戦が勃発し、翌年ドイツの大勝利が日本にも伝わり、「連戦連勝のドイツにならって、日本もアジア新秩序を作るべきだ」の大合唱がおこり、アメリカとの関係を改善しようとする米内内閣を陸軍が倒し、後継には反米派の近衛内閣と松岡外務大臣が就任したのである。

『そして、三国同盟を結ぶ方向で意見がまとまり、吉田海相は態度を保留するのが精いっぱい、海相のとりまきも親独派が多く、日々責められる中、自殺未遂まで追い込まれ、辞職してしまったのである。そして、後任の及川海相はついに三国同盟に海軍の軍備増強の条件付きではあるが賛成してしまった。』

そして、ついに海軍という最後の防波堤が崩れたときであった。』

その時の山本五十六連合艦隊司令官は「内乱では国は滅びない。戦争では国が亡びる。内乱を避けるために戦争に賭けるのは主客転倒も甚だしい」と親友の堀悌吉元中将に語っている。

『また、天皇の「独自録」には「私がもし開戦の決定に対して拒否したとしよう。国内は必ず大内乱となり、私の信頼する周囲の者は殺され、私の生命も保証できない。それは良いとしても結局狂暴な戦争は展開され・・・」』

筆者は、三国同盟に、最後に天皇は「やむを得ない」と了解したのも、そんな危惧がはたして背後にあったのかとも感じられるとしている。このようにして、天皇の防波堤も崩れたのである。』

そしてついに太平洋戦争へと突入し、350万人の死者という悲惨な結果に終わるのである。

筆者は、結びの章で、歴史をきちんと学べば、将来に大変大きな教訓を投げかけてくれる。昭和史の20年がどういう教訓を私たちに示してくれたか。以下の5つを示している

- ① 国民的熱狂を作ってはいけない。その国民的熱狂に流されてはいけない。
- ② 最大の危機において日本人は抽象的な観念を非常に好み、具体的な理性的な方法論を全く検討しようとしな
- い。起こったら困ることは起こらないと考える、物事は自分の希望するように動くと考える。
- ③ 日本型のタコツボ社会における小集団の弊害がある。（他の部署でのどんな貴重な情報も一切認めない）
- ④ ポツダム宣言の受諾は意思の表示でしかなく、終戦はきちんと降伏文書の調印をしなければならないという国際的常識を理解していなかった。常に主観的思考による独善に陥っていた。
- ⑤ 何か事が起こった時に、対処療法的な、直ぐに成果を求める短兵的な発想を求める。その場その場のごまか
- し的な方策で処理をする。広い意味での大局観がなく、複眼的な考えがほとんど不在である。

3月7日のテレビで原発事故の番組を見たとき、まさに昭和史の20年の教訓を思い出したのである。

日本の原発の安全神話。事故は起こらないと考える、起こったときの非常用の冷却装置の動作試験を当初ただけでその後していない。起こった時の動作試験の実施は、住民に不安を与えるという本末転倒な考え方。起こったら困ることは起こらないと考える思考。「想定外」という言葉。日本は、歴史から本当に学んだのだろうか。